

「森田との再会」

そのころにやっと本屋で、森田関係の図書に再会したのです。本は、水谷啓二先生の『森田療法入門』でした。このころには信仰によっても、この苦しみは解決できないのではないかという気持ちに傾いてきており、何と少しでもこの苦悩から解放されるためには、藁にもすがりつきたいという、必死の気持ちのときでありました。

読み進むうちに、森田療法関係施設として、水谷先生の啓心寮があげられていたので、そちらに電話をし、もう啓心寮は活動していないということなので、高良興生院を紹介されました。はじめて訪ねた興生院で、診察して下さった丸山晋先生に、それまでのつらい思いを訴え、先生から「それは本当につらかったでしょうね」と、しみじみしたことばをかけていただいたときには、思わずハラハラと涙が頬をつたいました。

他のところでは「気を大きくもて」とか「心配しなくてよい」などのことばが返ってくるばかりで、納得できなかつたのですが、初めて私のつらい気持ちや悩みを理解してもらえたことで、前途にほんの少しですが、光明を見出したように感じました。

しかし、「あるがまま」に苦痛も受け容れ、じつと耐えつつ、目的本位の行動をとるといふ教えは、森田の教えの一部を知っている程度で、長年、間違つた信仰のしかたをしていた当時の私には、即座にはなかなか実行し難いものでした。

とらわれがひどいので、先生から入院の話が出ましたが、これの決断には本当に迷いました。病欠によつて私の経歴に傷がつくという心配は、サラリーマンとしては当然であり、大阪の両親からも入院反対を説得されました。ちょうど三番目の子どもが生まれて二カ月足らずのときでもあり、家族を大阪に帰して入院するには、相当の覚悟が私にも家族にも必要でした。今考えれば自己中心的な面もあつたかもしれませんが、毎日が死ぬほどの思いだつた当時の私にとっては、興生院しかないとの気持ちが強く、通院のみで耐えていくには、毎日の生活が余りにもつらかつたのです。

このときの入院の決断が正しかつたかどうかは断言することはできません。あるいは、現在のよう発見会活動が普及していれば、入院の必要はなかつたかもしれませぬ。しかし、両親からの精神的自立が不十分だつた当時の私が、両親の反対を押し切つて最初に下した重要な決断であつたという意味では、極めて意義のあつたことでした。自分で下した決断に対しては、何としても耐えて、責任を負つていくという覚悟ができたと思います。

(続)